

大学における政治学教育はいかにあるべきなのか。数年来、この問題を反芻しつつ講義をすめている。ところで、学生諸君と接していて気にかかる点が若干ある。第一に、政治学を現実の政治の評論・解説であるとか、あるいは、選挙の予測をするのがその使命であるとか、漠然と考えている諸君が非常に多いことである。そのように理解する学生からすれば、政治学の古典的文獻の研究や思想史の検討など、古色蒼然たるものとしてしか目に映らないであろう。第二に、政治学のおもしろさをあげられないままに卒業していく諸君が多いことである。このような学生のほとんどは主体性をもった学習の方法が最後までわからなかったことが、主たる原因のように思われる。そもそも社会科学の学習は、「自我の覚醒」と「社会に対する問題意識」とがほどよくバランスをとるなかで、はじめて効果を發揮するものであろう。自我の確立につとめることにあまり熱心でない学生が、社会的諸問題の究明に積極的にかかわっていくことはかなり難しい。青年期にあつて、自我の形成はやはり思想・哲学研究と歴史研究をおして涵養されるものである。総じて、最近の学生は地道で基礎的な研究を敬遠するきらいがある。また、結論を早急にえようとする傾向もある。たしかに、変化を求め、新しいものに関心をよせるのが青年の特性ではある。

しかし、トレンドに敏感なことと基礎的な学問研究とは性質を異にする。基礎的研究をおろそかにする風潮が、やがては社会科学全体の根底を揺るがすほどの致命症になりはしないであろうか。危惧の念を禁じえない。現実政治の分析をおこなうにせよ、実際にナマの政治にコミットメントするにせよ、やはり政治学の基礎的な研究が必要不可欠な前提条件となってくる。基礎的かつ原理的な研究をおろそかにしたならば、応用や分析(科学)などはもとより成立しえないのである。そこで、政治学を専攻する学生諸君に基礎的研究の重要性を深く認識してもらいたいという願いから、本書の執筆を思いついた次第である。

書店に出かけても、政治哲学に関するテキストはあまりみかけない。「政治哲学」とタイトル書きしてあつたとしても、その中身をみると政治思想史のテキストであつたり、特定の政治思想家に関する研究書であつたりする。そもそも政治哲学に関する学界の了解事項も、今日にあつてもいまだに確定したものはないといつてもよいであろう。政治哲学を専門とする研究者の数も、全体数からすればごくわずかである。さらには、政治学科を設置する大学でも、政治哲学講座そのものを開設しているのは少数派であるし、たとえカリキュラム上配当されていたとしても担当者不在のまま休講扱いのケースも多くみうけられる。しかし、このような状況のもとでも、「政治哲学の復権」を唱える研究者たちの堅実な取り組みがみられる。本書は、最近の研究動向をふまえたうえで、政治哲学という学科目のアウト・ラインを学生諸君に提供することを第一の目的としている。本書の第二の目的は、政治学の学習上重要と思われる主要な基礎的概念の検討と整

理をおこなうことである。本書では、I 政治的なるもの、II 共同体的なるもの、III イデオロギー的なるもの、とおおきく三つのパートにわけたうえで、それぞれに関係するキー・概念の分析にあつた。

本書を一読されると、政治という現象は、支配者が政治権力を行使して服従者を統制するワン・ウェイの作用ではないことが明確になるであろう。政治という社会現象は、支配者と服従者との相互関係において成立するのである。ところで、支配Ⅱ服従関係は、政治の不変にして普遍的な原理である。その関係にあつて、物理的な権力を独占する強者である支配者が権力をもたない弱者である服従者に対しておこなう作用が、支配であり、統制であるとされる。しかしながら、服従者が支配者を牽制していることもまた、政治的空間ならではの特殊な現象として指摘することができる。服従者の支配者に対しての牽制という放射作用は、政治の生成過程をふまえたうえではじめて理解しえるものである。つまり、人権の獲得の歴史なり、権力制限の歴史なり、共同体の成り立ちについて研究していくことによって、はじめて理解可能となる。もとより、政治は現在というある一時点での社会現象ではない。それは、先行するさまざまなエレメント(歴史・思想・制度・文化など)との連続性、継続性から派生してくる現象なのである。さらに、現在に生じるわれわれの政策の選択や判断が、未来に対して確実に影響を及ぼしていくのである。われわれの思想や行動は、たえず進行していく歴史のプロセスのなかにある。それだけに、政治を理解する手がかりとして政治哲学の史的研究の重要性が認識されてくるのである。

筆者の基本的なスタンスは、国民主義と基本的人権主義に立脚した政治(哲)学の構築にある。最近の政治学は、数量分析や政治過程、さらには選挙の分析などに熱心なあまり、これらの基本的原理はすでに既知のこととして閑却しているようにも思われる。さらに、このような問題は憲法学なり、基礎法学に任せておけばよいというような風潮もなくはない。政治のプラグマティックな研究をおこなうにしても、やはり如上の諸点を正しく理解していなければ、確実な成果をうちだしていくことは困難であろう。ましてや、政治学の基礎的事項の習得を目的とする学生諸君にとつて、これらの諸点を繰り返しくりかえし学びつづけていくのが学習効果をあげる近道だと考える。現代は政治化の時代である、といわれて久しい。われわれは、市民生活を営むにあたって政治とのかかわりをさけることはできないのである。市民として政治にコミットメントしていくことが義務づけられるのであれば、当然のこととして国民主義と基本的人権主義のエッセンスを習得しておく必要がある。本書をとおして、また一年間の講義をとおして、学生諸君が政治を認識し、コミットメントしていくにあたって、いかばかりかの考える素材を提供できたとすれば、筆者の主意ははたされたのではないかと思う。

社会科学を学ぶに際しては、一定の読書量がもとめられる。読書の習慣のない学生は、社会科学を学ぶ資格をもたないといっても過言ではないくらいである。さらに重要なポイントは、学習にあたって活字の上面をとおりにいっぺんながめるのではなく、思索を加味していくことを忘れてはならないことである。本書を一読された学生諸君はさらにすすんで、専門書や学術論文に直接

にふれて、研究と理解を深めていかれるのをすすめてほしい。その際、巻末の参考文献が指針となるであろう。

本書は、筆者が担当した「政治哲学」(一九九五年度)の講義ノートに基づくものである。しかし、記述にあたっては政治哲学のみならず、政治学入門や現代政治理論などの学科目の補助教材としての使用にたえるように工夫を凝らした。類書がなかっただけに、本書が活用されることをのぞむものである。最後に、企画の段階からご配慮をいただいた法律文化社の小西英央、畑光両氏にお礼を申し上げます。

一九九七年一月

大塚 桂

はしがき

【第2版にさうじつ】

本書は、刊行以来標準的な政治哲学のテキストとしての評価をえてきた。再版にあたって、旧版における三章(権威、イデオロギー、正義)を削除して、あらたに体制、公共性、文化を差し替えることにした。初版以来、政治哲学に関する研究状況も進展し、相当数の成果も打ち出されている。それらの学界動向をふまえつつ、本書の全面的な改訂を考えている。近々、読書界のみならず研究者、学生諸氏の期待にこたえたい。

二〇一一年二月

大塚 桂